

国語科学習指導案

日時 平成15年9月3日

学級 宮古市立河南中学校3年A組33名

指導者 三上 えり子

1、単元(教材) 四 状況に生きる 人間の生きる姿をとらえよう「生ましめんかな」

2、教材について

(1)四単元「状況に生きる」と詩教材「生ましめんかな」

この「生ましめんかな」は、ヒロシマの原爆投下の直後に、一人の産婆が産気づいた人から赤子を取り上げて自分は血まみれになって死んでいったという詩である。

この単元には、小説「故郷」随筆「二つの悲しみ」詩「お辞儀する人」の三つの教材が入れられていて、どの作品も人間が自分をとりまく状況と対峙し、状況とのかかわりの中で人間としてのどう生きていくかを言語によって表現したものである。また、本単元は「読むこと」に本格的に取り組む学習としては中学校最後のものとなり、昨年、自主教材として取り入れた「ヒロシマ神話」『夕焼け』の延長線上に位置したい単元でもある。

そこで、この三つの作品の他にもう一編「生ましめんかな」という詩も持ち込み教材として投入し、生徒たちと共に「人間として生きるということ」について考えたいと思った。

教材解釈は、あとの資料で詳しく記したが、作者栗原貞子さんは、広島で被爆。それ以後、ひたすら原爆についての詩や文章を書き続けている人である。この詩は敗戦の翌年に発表されたものである。栗原さんは、人づてにこの詩に書いた事実を聞き、作詩する。その時生まれた女の子は成長して広島で生活しているという。

歴史の波にもまれて生きてきている人たち、信じがたく驚くようなヒロシマの事実を描いた「生ましめんかな」を、中国残留孤児を扱った「お辞儀する人」と共に詩教材として味わせたい。

「言葉の芸術」といわれる詩では、選び抜かれた言葉によって、韻律・イメージ・思想が一体となり、読者の心に感動をもたらす。とすれば、言葉を丁寧に読み、イメージを広げ、作者の思想に迫っていくことが詩を味わうことの第一であり、さらにそこから音読・朗読・群読などで詩の持つ韻律の美しさを体得させていくことは、言語感覚を養う意味でも大きな意味を持つものと考えられる。

(2)教材の自主編成について

大村はま先生は、自分の目の前の生徒たちのためにどんな教材をどう与えるかを常に自問し、実践した偉大な国語教師であると思っている。今風の言い方で言えば、一人一人の生徒を診断評価し、つけるべき国語の力をとらえそこから、どの場面でどんな教材を与えれば効果的であるかを実践したと言えるように思う。指導と評価の一体化とはこのことをいうのだと考えている。

尊敬すべき偉大な実践は、変化し続ける教育現場の状況の中でも不変なものとして常に私を圧倒する。自分もわずかながらでもそんな先生にあやかりたいと考えている。教科書や指導要領を鑑みながらも、良い教材を見る目や生徒たちにつけるべき力をどんな教材をもちいて指導するかなどという自主研修をすることで、わずかでも良い実践に近づきたい、そのような姿勢を持って生徒たちの前に立ち続けたいと考えている。

そのようなことから自主教材を取り入れたり、教材の編成がえはよく行っている。生徒には「教科書を学ぶ」と「教科書で学ぶ」とどう違うかを助詞の授業の中で考えさせ、私の姿勢についても理解させてはいる。

今回の教材もそのような考え方から、持ち込んだものである。

3、生徒の実態と本教材

一年生のときから受け持っている生徒たちである。また、小学校の時から大きな問題を抱えて入学した生徒が多い学年でもある。全体的には落ち着いているが、生活上の細かい課題は山積みである。しかし、一年生の時から受け持っていることで、国語の授業においては多くの生徒がまじめには取り組んでいる。

よく、「楽しい授業をする」ことが大切だという。しかし、私の授業はいわゆる「楽しい」という言葉とは無縁である。「誠実」という言葉を私はよく生徒たちに用いる。私自身も生徒に誠実に授業をするということをモットーにしているが、同時に生徒たちにも「誠実」に学習することを厳しく求めている。学年長という立場の私の授業に厳しさを求めることで、学習への姿勢を育てたいと考えているからである。いろいろな問題を抱える本学年であるからこそよけいにもその必要性を感じている。

学力的には、高いとはいえない。教科によってはかなり落ち込んでいるものもある。また、国語においては、男子に比較的活字ばなれしている生徒が多く、語彙指導に苦勞している。ただ、昨年度からずっと続けている自己評価カードの「今日の授業のまとめや感想」の欄には、多くがきちんと文章として記入し提出している。発言をすることが不得意な生徒は自分の思いを私に伝えてくれる唯一のもののようなものである。国語の能力の観点一つ一つを一人

一人診断すれば、多くの課題があるが、その自己評価カードの記入やわたしからの返事や評価によって、自分の課題を把握できている生徒も多くなってきている。

本学年の生徒たちの中には情操面で優れている生徒や感性が豊かな生徒もあり、情感に訴えるだろう本教材は、そのような生徒たちに読みを導かれながら、全体的にも心に響くものと思われる。

4、指導目標

~~表現の特徴、注意して読み、状況と人間のかかわり~~

- (1)文学的文章を読み、物の見方、考え方を深めようとする態度を育てる。
- (2)表現の仕方や文章の特徴に注意して読み、作者の表現意図をとらえさせ、主題を読み取らせる。
- (3)文章を読んで、人間の生き方や社会などについて考えさせる。

5、指導計画（15時間）

指導内容	時間	評価基準				
		国語への関心・意欲・態度	話す聞く能力	書く能力	読む能力	言語についての知識理解技能
第二次世界大戦について、理解させる。「お辞儀する人」の一人読み。	1	詩に興味を持ち、分からない言葉などを意欲的に調べる。			社会的な背景の理解の上に、描かれている状況を読み取ることができる。	語句の意味を理解する。用いられている技法をわかる。
「お辞儀する人」の読解、鑑賞	1	内容を把握しようとし、積極的に発言したりまとめたりする。			前時の一人読みを生かして、技法の表現意図を理解し、筆者の感動の中心を読み取ることができる。	
「生ましめんかな」の一人読み。地下室の情景把握。	1	自分なりに調べたり考えようとする。情景をまとめられる。			地下室の中の情景や状況を読み取ることができる。技法の表現意図などから、作者の思いを一人読みすることができる。	助詞や助動詞の意味用法がわかる。どんな表現技法が用いられているかをわかる
「生ましめんかな」の読解、鑑賞	本時	進んで発言しようとし、読み取ろうとする。			原爆という悲惨な状況の中で、新しい命を生み出そうとする人たちの姿を読み取り、そこから「生ましめんかな」という言葉に込められた思いを考察することができる。	
「二つの悲しみ」の読み。戦で失ったものを考えさせる。	1	範読をまじめに聞く。課題を精一杯考える。			戦争でわたしたちが失ったものを考えまとめることができる。	
魯迅の時代を説明。「故郷」を読み、感想を持たせる。	1	まじめに読み、初読の感想をしっかりと書く。			小説の時や場所、登場人物などの要素構成を大まかにとらえることができる。	
帰郷の場面を読み取らせる。	1	進んで、発問について考えようとする。			「わたし」が帰郷した事情やそのときの心情を表現された言葉から読み取ることができる。	
ルントウとの思い出の場面とヤンを読み取らせる。	2	学習シートをしっかりと書き込もうとする。			思い出の中のルントウと「わたし」を比較読みできる。昔のヤンと現在のヤンの違いを読み取ることができる。	
ルントウとの再会の場面を読み取らせる。	1	発問に対してよく考え、まとめようとする。			表現された一つの言葉から形象を読み取り、そのときの「わたし」とルントウの心情を考察する。	
離郷の場面を読み取らせる。	2	一つ一つの言葉から心情を考察しようとする。			離郷のときの会話や「わたし」の心情描写から、「わたし」の思いを正確に読み取ることができる。	
最後の場面を読み「わたし」の思いを読み取らせる。	1	発言はできなくても既習の内容から、分析的な読み取りをしようとする。			既習内容を振り返り、最後に「わたし」が考えたことに深く感じたことを読み取ることができる。	
単元全てを振り返り、状況と人間にかかわる自分のテーマを決めてレポートを作成させる。	1	これまでのまとめの文章から課題を決め自分なりのレポートにしあげようとする。	課題にそって既習事項を材料にし、人間が生きているということとその生後なりにまとめることができる。			
「状況と人間」というテーマでパネルディスカッションを行い、感想を持つ（総合の時間との抱き合わせ）	2	話を真剣に聞き、自分なりの意見を言いたり話したりしようとする。	他の人の話を要点をとらえて聞き、それについて自分の意見をまとめたり話したりできる。			

6、本時の指導

(1)本時の指導目標

- ①原爆という凄惨な状況の中で新しい命を生み出そうとする人たちの姿を読み取り、そこから「人間として生きる」という意味を考える。(読む能力)
- ②進んで発言しようとし、読み取ろうとする。(国語への関心意欲態度)

(2)本時の指導構想

前時の一人読みを生かした発問を組み立てながら、主題に迫りたい。また、科学的読みにおける深層の読みの手法を自分なりの指導過程のなかに取り入れながら、レトリックなどに注目させ表現意図を考えさせたい。さらに、文語的な表現もあるので、その点については一人読みの段階で机間巡視をしながら注入し、理解させたい。授業の始めに国語教室通信を配布して本時の読みの意欲を喚起したり、読みの一助としているが、それも取り入れていきたい。

(3)本時の展開

	学習内容	学習活動	留意点など
13	<p>1、前時の想起</p> <p>語句に注目しながら地下室の情景をイメージ化し、状況を確認する。</p> <p>本時への意欲喚起</p>	<p>①時、所、状況を大まかに確認する。</p> <p>②地下室の状況(情景)を読み取る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「人いきれ」の語句の意味の確認 <p>教科リーダーが配った国語通信にしたがって、前時のノートから地下室の状況情景について発表させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「負傷者たちは～地下室をうずめていっぱいだった」の表現意図 <p>教科リーダーに、導入部のまとめをさせ、本時の見通しも発表させる。</p> <p>〈期待される教科リーダーのまとめ〉</p> <p>負傷者たちはを主語にしたことで、苦しみや痛みを 聞かされてくるもまた、体言止めにしたことで、その苦痛が読者の 耳に伝わり他の悲惨な状況が次々とはたきあがってくる</p>	<p>挙手発言</p> <p>質疑応答を繰り返す</p> <p>前時に一人読みで調べている教科リーダー主導で、導入部は進めさせる。</p> <p>内容が多いので、スピーディーに</p> <p>教科リーダーに、導入部のまとめをさせ、本時の見通しも発表させる。</p> <p>ここで一旦まとめの板書</p>
30	<p>2、本時のめあての確認</p> <p>3、範読</p> <p>4、地下室にいた人々や産婆の思いを読み取る。</p>	<p>めあての指名読み</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>「生まれめんな」という言葉に込められた思いについて考える。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・「不思議な」という言葉についての読み <p>〈期待される生徒の反応〉</p> <p>具体的に意味する言葉は前文が生まれる この地下室の状況にそではない。驚き</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「自分の痛みを忘れて気づかった」と接続詞「と」のかかわり「私産婆です」の「が」の使い方を読み取る。 	<p>紙板書を準備し、発問はそれを用いながら視覚に訴えて行く。ゆっくりと考えさせる。</p>

<p>5、反復・倒置などの技法やこれまでの読みから、主題を読み取る。</p>	<p>〈期待される生徒の反応〉</p> <p>「赤い坊が生まれる」という言葉によって辺りの雰囲気が変わった。 うめき声があった。「だれかどうかしてくれ」とか、「産婆はひびきのなごという声もあつたのではないか。だから「私が産婆です。・・・なのだ。辺りの人たちが気遣う。たごが「どき」という接続詞から読み取る。</p> <p>・「血まみれのまま」の「まま」から助産の様子を読み取る。</p> <p>〈期待される生徒の反応〉</p> <p>「この血といふのは、産婆の責務の甘がなすの血ではない。赤子が産み落とされるときの血でもある。「若い女」も赤子も血だらけのはずである。命を生み出した「血」、原爆の責務にまじる「血」、それらにもみかれた「まま」死なな産婆。うめいては産婆が、おそろしく産婦の満足感を感じて死に推された。そのまわりの人たちが命への感動があった。</p> <p>一旦、板書をノートに書かせる。</p> <p>感動的な読みをさせたい。 感性が豊かな生徒を中心に発言させる。</p> <p>〈期待される生徒の反応〉</p> <p>原爆という理不尽なものの犠牲になり自分の命が失われる。あるときも、「新しい命」の尊厳を感じて、そのために最後の力を振り絞った。老への責務。人間とはそういうものではないかという人間としての思いの大切さ。</p> <p>反復を扱っていることは、命を生み出したいという強い気持ちを表現しているだけではない。文庫の人の思いださしめと。</p> <p>一方で原爆という残酷なこともさうであるのも人間であり、その犠牲になるのも人間であること。さういふことをわがががながら、自分が犠牲になりながらも「命」を生み出しめんとする人間への限りない賛美とさるせなさ。</p>	
<p>終 6、まとめと次時の予告 結</p>	<p>・指名読み</p> <p>・読みのまとめを自分の言葉で書く</p> <p>〈期待される生徒のまとめ〉</p> <p>原爆で命を失うたばかりながらも、新しい命を生み出した人達に「生ましめんかな」という言葉には、そんな命の尊さへの思いがもたらしていると思う。人間として生きるものかと思つた。「血まみれのまま」のどきる。私は本当に感動した。悲しい詩でもあるけど人間でよか。天と思つた。</p> <p>・「二つの悲しみ」の予習の指示</p>	

(3)本時の評価

評価規準 (目標)	評価基準		
	A	B	C
原爆という凄惨な状況やその中で新しい命を生みだそうとする人たちの姿を読み取りそこから「人間として生きる」ということの意味を考える。(読む能力)	言葉や技法からの確に情景を読める 「生ましめんかな」という意味を考えることができる。 まとめの文章を豊かに	友達や教師の言葉などから情景を読める 友達や教師の言葉から左のことを考える。 まとめを的確に書ける	板書と教師のまとめの説明を聞かせることでB段階に近づける。 ノートを集めて本時の教師によるコメントに主題をわかりやすく書いてやることでB段階に

	書くことができる。		近づける。
進んで発言しようとし読み取ろうとする。 (国語への関心意欲態度)	常に教師の発問や指示に反応し、的確な	教師の発問や指示に反応しようとする。	指名したり机間巡視しながら励ましアドバイスする。

7、 板書計画

別紙

8、 座席表 (生徒一人一人の本時にかかわる情報)

別紙

9、 教材解釈 (資料)

別紙

10、 「国語教室」通信 (資料)

別紙

板書計画

生ま—めんがな

栗原貞子

生ま—めんがな—といふ言葉に込められた思いを
読みとりう。

一九五五年八月十六日、広島原爆投下後の

5月被

〜わがいたビルディングの地下空

生ま—血の臭い
死臭・汗臭・息

うめき声...

ぐずり泣き声
假々泣く声

原爆の負傷者
うすめていけぬ
地獄の底の底

その中から不思議な声が

端に響いた
「あ、た、た」
理由

赤ん坊が生まれる

意識を取り而る人は、なにか
産婆は、いかに、
「さあ、さあ」

「さあ、さあ」のであつた
→ 重傷者
今はずめてない

「私」上の遺言

「私」産婆です。

母体
か／＼、漸く生命は生まれた
か／＼...
おすみの、おすみの死んだ
自分の負傷した血
赤子を産み出した血
産婆
「さあ、さあ」

生ま—めんがな

文語

生ま—めんがな
己が命を捨つても

文語
（）
反復法

産婆は受けついで、女を助けて

・産婆は受けついで、女を助けて

・産婆は受けついで、女を助けて

・産婆は受けついで、女を助けて

原爆の犠牲と受けついで、
新に生命を生ま—めんとする
人間の生きている姿への限りない賛美と愛を

(場合によりて
減除)

(1) 作者について

栗原貞子 一九一三年広島県に生まれる。広島で原爆に遭い、その後、平和の詩を書き続けている。「ヒロシマ」というとき「私は広島を証言する」などがある。

(2) 作品解説

生ましめんかな

「生ませたい」という強い言い方

①「わかれたビルディングの地下室の夜であつた。」

「こわれた」の地下室の夜だった」と「こわれた」「地下室」「夜」と暗いイメージを重ねることで、読み手を地下室の夜何か起きるのだなというドラマの入り口に立たせる。

②「原子爆弾の負傷者たち」③「ローソク 本ない地下室をうすめて」

「ローソク 本ない暗い地下室は原子爆弾の負傷者たちでいっぱいにならずめられていた。」という表現と比較してみると、この表現は、「負傷者たち」を主語にすることで負傷者たちの動きや苦しみが読み手に伝わっており、「負傷者たちはうすめて」なるので、彼らの意志的な行動が読み取れる。

④「生ませたい」という強い言い方

体言を重ねて、最後まで体言止めにすることで、そのほかの凄惨な状況を、人間が、肉体の塊のようになりつつあるような、この世のものとも思えない無残な状況を想像させる。もしかして、既に死んでいる人もいたのかもしれないし、傷口がくさってうじがわき、そのうじが肉を食べる音などが聞こえたかもしれない。

⑤「その」の指示する内容

「その」の指示する内容②④⑤「死に近い無残な状況の中から」「不思議な声」とは具体的には次の行の「赤ん坊が生まれる」を指す。「不思議な」とは、誰もが死んでもおかしくない状況の中で「赤ん坊が生まれる」とはどういうことかということ。

⑥「赤ん坊が生まれる」ということ

⑦「赤ん坊が生まれる」ということ

⑧「地獄の底」↓属性は「死んだ人が苦しんでいる場所」ということであるから、「もうしんだも同然のよう」な人が更に苦しんでいる場所」ということだろうか。「のだ。」は、理由を表す。二回繰り返しているから、「不思議な」に対応して「場」にそぐわない」という「驚き」も読み取られる。

⑨「人々」↓原子爆弾の負傷者たち。⑩「私」が氣遣っている内容。

⑪「と」「私」が産婆です。私が生ませましよう」と言つたのは⑬「さ」までうめいていた産婆です。

⑫「と」↓接続詞、順接の意。(校門を入つた。と、ベルが鳴つた)時間的、心情的空間を生み出す。「すると」と比較すると、時間的にやや早い様子や多少の意外性が読み取れる。また、「私」の「が」に注目すると、なぜ「は」ではないのだろうかという疑問が浮かぶ。つまり、⑭「人々が氣遣つた」が具体的にここから浮かび上がってくる。誰かが、「誰か生ませてやっほほしい」とか、「産婆はいないのか」などという声があつたのだと読み取れる。だから、「私が産婆です。私が生ませましよう」という表現になる。

⑬「かくて」↓「地獄の底」で新しい生命は生まれ、死んでいくという産婆やまわりの人達の「人間として生きた、生きている」という思いを読み取ることが出来る。

⑭「死」という言葉に象徴されるような凄惨な状況の中で新しい命が生まれ、その命を取り上げた産婆は、自分の流した血と赤子を取り上げた血で血まみれになり、そのまま息をひきとつた。「かくて」という言葉には「自分の痛みを忘れて氣遣つた」人々や血まみれになりながら必死にとりあげた産婆の様子やおそろく産声をあげて生まれ出たであろう赤子の様子などをイメージできる。また、人々の「うましめんかな」という思いの中で生まれたと読み取ることが出来る。「血まみれのまま」の「まま」からは、「生ましめん」とて、果てていくという産婆やまわりの人達の「人間として生きた、生きている」という思いを読み取ることが出来る。

⑮「生ましめんかな」とは、産婆だけでなく、この場にいる人たちが多くの声である。そのことは反復されていることからも読み取れる。また、「己が命捨つとも」という言葉は、生ましめんのために命を捨てたのではなく、「原子爆弾」という非人間的な化学兵器の犠牲になつていとも」と読みたい。

⑯「生ましめんかな」とは、産婆だけでなく、この場にいる人たちが多くの声である。そのことは反復されていることからも読み取れる。また、「己が命捨つとも」という言葉は、生ましめんのために命を捨てたのではなく、「原子爆弾」という非人間的な化学兵器の犠牲になつていとも」と読みたい。

⑰「生ましめんかな」とは、産婆だけでなく、この場にいる人たちが多くの声である。そのことは反復されていることからも読み取れる。また、「己が命捨つとも」という言葉は、生ましめんのために命を捨てたのではなく、「原子爆弾」という非人間的な化学兵器の犠牲になつていとも」と読みたい。

⑱「生ましめんかな」とは、産婆だけでなく、この場にいる人たちが多くの声である。そのことは反復されていることからも読み取れる。また、「己が命捨つとも」という言葉は、生ましめんのために命を捨てたのではなく、「原子爆弾」という非人間的な化学兵器の犠牲になつていとも」と読みたい。

⑳「生ましめんかな」とは、産婆だけでなく、この場にいる人たちが多くの声である。そのことは反復されていることからも読み取れる。また、「己が命捨つとも」という言葉は、生ましめんのために命を捨てたのではなく、「原子爆弾」という非人間的な化学兵器の犠牲になつていとも」と読みたい。

㉑「生ましめんかな」とは、産婆だけでなく、この場にいる人たちが多くの声である。そのことは反復されていることからも読み取れる。また、「己が命捨つとも」という言葉は、生ましめんのために命を捨てたのではなく、「原子爆弾」という非人間的な化学兵器の犠牲になつていとも」と読みたい。

㉒「生ましめんかな」とは、産婆だけでなく、この場にいる人たちが多くの声である。そのことは反復されていることからも読み取れる。また、「己が命捨つとも」という言葉は、生ましめんのために命を捨てたのではなく、「原子爆弾」という非人間的な化学兵器の犠牲になつていとも」と読みたい。

㉓「生ましめんかな」とは、産婆だけでなく、この場にいる人たちが多くの声である。そのことは反復されていることからも読み取れる。また、「己が命捨つとも」という言葉は、生ましめんのために命を捨てたのではなく、「原子爆弾」という非人間的な化学兵器の犠牲になつていとも」と読みたい。

㉔「生ましめんかな」とは、産婆だけでなく、この場にいる人たちが多くの声である。そのことは反復されていることからも読み取れる。また、「己が命捨つとも」という言葉は、生ましめんのために命を捨てたのではなく、「原子爆弾」という非人間的な化学兵器の犠牲になつていとも」と読みたい。

㉕「生ましめんかな」とは、産婆だけでなく、この場にいる人たちが多くの声である。そのことは反復されていることからも読み取れる。また、「己が命捨つとも」という言葉は、生ましめんのために命を捨てたのではなく、「原子爆弾」という非人間的な化学兵器の犠牲になつていとも」と読みたい。

㉖「生ましめんかな」とは、産婆だけでなく、この場にいる人たちが多くの声である。そのことは反復されていることからも読み取れる。また、「己が命捨つとも」という言葉は、生ましめんのために命を捨てたのではなく、「原子爆弾」という非人間的な化学兵器の犠牲になつていとも」と読みたい。

㉗「生ましめんかな」とは、産婆だけでなく、この場にいる人たちが多くの声である。そのことは反復されていることからも読み取れる。また、「己が命捨つとも」という言葉は、生ましめんのために命を捨てたのではなく、「原子爆弾」という非人間的な化学兵器の犠牲になつていとも」と読みたい。

㉘「生ましめんかな」とは、産婆だけでなく、この場にいる人たちが多くの声である。そのことは反復されていることからも読み取れる。また、「己が命捨つとも」という言葉は、生ましめんのために命を捨てたのではなく、「原子爆弾」という非人間的な化学兵器の犠牲になつていとも」と読みたい。

㉙「生ましめんかな」とは、産婆だけでなく、この場にいる人たちが多くの声である。そのことは反復されていることからも読み取れる。また、「己が命捨つとも」という言葉は、生ましめんのために命を捨てたのではなく、「原子爆弾」という非人間的な化学兵器の犠牲になつていとも」と読みたい。

㉚「生ましめんかな」とは、産婆だけでなく、この場にいる人たちが多くの声である。そのことは反復されていることからも読み取れる。また、「己が命捨つとも」という言葉は、生ましめんのために命を捨てたのではなく、「原子爆弾」という非人間的な化学兵器の犠牲になつていとも」と読みたい。

㉛「生ましめんかな」とは、産婆だけでなく、この場にいる人たちが多くの声である。そのことは反復されていることからも読み取れる。また、「己が命捨つとも」という言葉は、生ましめんのために命を捨てたのではなく、「原子爆弾」という非人間的な化学兵器の犠牲になつていとも」と読みたい。

㉜「生ましめんかな」とは、産婆だけでなく、この場にいる人たちが多くの声である。そのことは反復されていることからも読み取れる。また、「己が命捨つとも」という言葉は、生ましめんのために命を捨てたのではなく、「原子爆弾」という非人間的な化学兵器の犠牲になつていとも」と読みたい。

㉝「生ましめんかな」とは、産婆だけでなく、この場にいる人たちが多くの声である。そのことは反復されていることからも読み取れる。また、「己が命捨つとも」という言葉は、生ましめんのために命を捨てたのではなく、「原子爆弾」という非人間的な化学兵器の犠牲になつていとも」と読みたい。

㉞「生ましめんかな」とは、産婆だけでなく、この場にいる人たちが多くの声である。そのことは反復されていることからも読み取れる。また、「己が命捨つとも」という言葉は、生ましめんのために命を捨てたのではなく、「原子爆弾」という非人間的な化学兵器の犠牲になつていとも」と読みたい。

㉟「生ましめんかな」とは、産婆だけでなく、この場にいる人たちが多くの声である。そのことは反復されていることからも読み取れる。また、「己が命捨つとも」という言葉は、生ましめんのために命を捨てたのではなく、「原子爆弾」という非人間的な化学兵器の犠牲になつていとも」と読みたい。

㊱「生ましめんかな」とは、産婆だけでなく、この場にいる人たちが多くの声である。そのことは反復されていることからも読み取れる。また、「己が命捨つとも」という言葉は、生ましめんのために命を捨てたのではなく、「原子爆弾」という非人間的な化学兵器の犠牲になつていとも」と読みたい。

㊲「生ましめんかな」とは、産婆だけでなく、この場にいる人たちが多くの声である。そのことは反復されていることからも読み取れる。また、「己が命捨つとも」という言葉は、生ましめんのために命を捨てたのではなく、「原子爆弾」という非人間的な化学兵器の犠牲になつていとも」と読みたい。

㊳「生ましめんかな」とは、産婆だけでなく、この場にいる人たちが多くの声である。そのことは反復されていることからも読み取れる。また、「己が命捨つとも」という言葉は、生ましめんのために命を捨てたのではなく、「原子爆弾」という非人間的な化学兵器の犠牲になつていとも」と読みたい。

㊴「生ましめんかな」とは、産婆だけでなく、この場にいる人たちが多くの声である。そのことは反復されていることからも読み取れる。また、「己が命捨つとも」という言葉は、生ましめんのために命を捨てたのではなく、「原子爆弾」という非人間的な化学兵器の犠牲になつていとも」と読みたい。

主題

極限状態の中でも、産気づいた若い女を氣遣つた人々。極限状態の中でも命を生み出すという使命を果たそうと思つた産婆。戦争という非人間的なことの犠牲になり自分の命が果てるかもしれない時だったからこそ、新たな命を生み出すことを人々は強く願つたのだ。

理想

人間の心の中には、人と争い、人を征服したいという本能もある。しかし、同時に「命を生み出す」とこのへの畏敬の念がある。人間の作った原子爆弾の犠牲になりながらも、人間として他の命を生ましめんとするその姿と、その心へのかぎりない賛美とやるせなさを描いている。

結

㉑「生ましめんかな」が反復され、更に強調されている。また、「己が命捨つとも」が最後に示され倒置になつていくことや、句読点がないことからもここに主題が収斂されていると読みたい。

「生ましめんかな」とは、産婆だけでなく、この場にいる人たちが多くの声である。そのことは反復されていることからも読み取れる。また、「己が命捨つとも」という言葉は、生ましめんのために命を捨てたのではなく、「原子爆弾」という非人間的な化学兵器の犠牲になつていとも」と読みたい。

転

死という言葉に象徴されるような凄惨な状況の中で新しい命が生まれ、その命を取り上げた産婆は、自分の流した血と赤子を取り上げた血で血まみれになり、そのまま息をひきとつた。「かくて」という言葉には「自分の痛みを忘れて氣遣つた」人々や血まみれになりながら必死にとりあげた産婆の様子やおそろく産声をあげて生まれ出たであろう赤子の様子などをイメージできる。また、人々の「うましめんかな」という思いの中で生まれたと読み取ることが出来る。「血まみれのまま」の「まま」からは、「生ましめん」とて、果てていくという産婆やまわりの人達の「人間として生きた、生きている」という思いを読み取ることが出来る。

承

「と」「私」が産婆です。私が生ませましよう」と言つたのは⑬「さ」までうめいていた産婆です。

起

「こわれた」の地下室の夜だった」と「こわれた」「地下室」「夜」と暗いイメージを重ねることで、読み手を地下室の夜何か起きるのだなというドラマの入り口に立たせる。